



近代日本に於ける中国白話小説「三言」の受容について：新たに発見された松井等の事例(1922年)を中心として

著者	勝山 稔
雑誌名	国際文化研究
号	20
ページ	73-86
発行年	2014-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/57221

近代日本に於ける中国白話小説「三言」の受容について

——新たに発見された松井等の事例（1922年）を中心として——

勝 山 稔

要 旨

松井等『伝説之支那』は、「三言」所収篇において現在確認出来る最古の口語訳である。本書は松井が中国の民俗性を考察する資料として翻訳したものを書肆の要望で出版したものであった。松井訳は、当時の翻訳水準から見ると精度の高い翻訳であるが、当時珍しい口語訳にしたのは彼の経歴に由来する可能性が高い。松井と同時期に中国渡航経験を持つ宮原民平も、古来の漢学と現実の中国像が大きく乖離していることを痛感し口語訳を推進した。松井もかかる経験から従来の訓読翻訳に疑問を感じ、口語訳を実施したのではと推論できる。

キーワード：白話小説／松井等／口語／翻訳／訓読

はじめに

筆者は、平成23年～26年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B）「海域交流をキーワードとした中国通俗文芸の学際的研究」に関する事例研究の一環として、中国白話小説の日本への受容に関する考察を行っている。

その中でも、各論として明代の代表的な短篇白話小説である「三言」所収篇（『古今小説』『警世通言』『醒世恒言』及び「三言」の選集『今古奇観』・『京本通俗小説』収録篇）の事例を設定し、時系列に即して継続的な分析を試みている。本論は複数の拙稿¹にまたがる考察である所から、論考の便宜上これまでの経緯を少しく説明する。

これまでの研究では、明治時代から昭和30年代まで翻訳に携わった人物として、服部誠一や幸田露伴、宇佐美延枝、東吐山、佐藤春夫、鈴木真海、今東光、伊藤貴麿、柳田泉、増田渉、井上紅梅、神谷衡平、林房雄、魚返善雄、吉川幸次郎、辛島驍、星野蘇山、混沌庵について考察してきた。しかし長期にわたる調査の結果、存在が知られていなかった

- （1）松井等^{まつ い とし}『伝説之支那』（1922年）
- （2）近藤總草「新訳今古奇観」（『満蒙』連載）（1930年）
- （3）榛原茂樹「小説三考廉」「李白伝」「薄情郎を打つ」（『同仁』連載）（1930年）

という翻訳事例を新たに発見した。

本論は、この種の「新たに発見された」3例の中から、受容史の観点から重要な発見である松井等訳『伝説之支那』（1922）を紹介し、従来の考察を補完することとしたい。

1. 新たに発見された翻訳事例

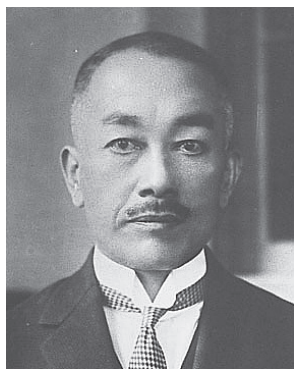
松井等『伝説之支那』の刊行は、奥付によると発行日が大正11年（1922）9月18日とある。これまでに「三言」所収篇における最古の口語訳事例であった桃義会しなじょうえんひわの翻訳『支那情艶秘話 鴛鴦譜えんおうふ』（大正13年7月15日、上海至誠堂書店刊）よりも約2年早く口語訳を発表している。

筆者は2012年に実施した国立国会図書館での資料調査において、従来文言小説の翻訳とされていた『伝説之支那』に「三言」所収篇2篇が口語訳されていることを発見した。

『伝説之支那』は、稀覯本が多い「三言」所収篇の翻訳に比べて、広く読まれていた書籍である。これまで考察した「三言」所収篇の訳本の多くは、全国の公立図書館や大学図書館をすべて含めても2～3館の所蔵に留まることが多かったが、本書は、東京大学総合図書館など全国18の国公立大学附属図書館、公立図書館では山形県等3つの県立図書館に所蔵されるほか、戦前の代表的な在外文庫である天津図書館日本文庫にも収蔵されている、ただ本書は、従来六朝代から宋代にかけての文言小説の翻訳集と認識されていたため、巻末に僅かに収録された短篇白話小説に目をとめる人は、今まで現れなかったのであろう。

『伝説之支那』の構成は、内容的に大きく4種類に類別され、(1)『搜神記』『搜神後記』『抱朴子』『続齊諧記』等の六朝志怪小説が6種、(2)『枕中記』『離魂記』『酉陽雜俎』等の唐代伝奇小説が16種、(3)『太平広記』『夷堅志』『春渚紀聞』『夢溪筆談』『鉄園山叢談』など随筆・筆記を含めた宋代の文言小説が12種、(4)その他に正史の『南史』や『洛陽伽藍記』などの史料も収録されている。翻訳が収録された作品は35種（総計60篇）であるが、その中で巻末の2篇（「拗相公」「菩薩蛮」）が、当時発見されたばかりの短篇白話小説集『京本通俗小説』の翻訳であった。

『京本通俗小説』は、1915年に公表された短篇白話小説の残巻で、当時は、「支那俗文学史研究の材料として極めて貴重なる発見」²として学界で脚光を浴びた。ただ本書刊行後に、内閣文庫・帝國図書館・徳川家蓬左文庫から『古今小説』『警世通言』等が相次いで発見され、『京本通俗小説』所収7篇は、全て「三言」中に収録³されていることが判明する。そのため『京本通俗小説』は「三言」所収篇の一つとして扱われることとなるが、『京本通俗小説』の発見から僅か7年後に邦訳が



松井等
(お茶の水女子大所蔵)

刊行されていたこと。そして、それが口語訳であった点は受容史の観点から見ても看過できない発見である。

訳者・松井等（1877～1937）については、自身の回想録がなく、松井自身を考察した先行研究も確認できない。そのため、ここではまず平凡社刊『大人名事典』の紹介記事を掲げる。それによると、

東洋歴史学者。明治十年六月陸軍中將男爵大藏平三の長男として東京神田に生まれる。母マツは旧旗本松井甲太郎の長女。母方の姓を継いで氏を冒す。第一高等中学校を経て、明治三十四年七月東京帝国大学文科大学史学科を卒業。(1)同十二月志願兵として入営、三十七年歩兵少尉に任官す。日露役の勃発するや応召、野津第四軍に編入されて各地に転戦、翌年中尉に昇進し、三十九年一月帝都に凱旋した。(2)かくて後年の人生観従っ

てその独自の史観はこの間の軍事生活により多大な影響を受けたものの如くである。

同年九月職を東京帝国大学史料編纂掛に奉じ、翌四十年四月国学院大学講師となり、爾来没年に至るまで三十年間の永きに亘り一私学の教授に甘んじ子弟の教育に専念した。……昭和十二年五月十日病没す。年六十一⁴。

とある。下線部（１）の如く、彼は大学卒業後に志願兵として入営し、日露戦争では1904年（明治37年）6月24日に編成された野津道貫大将の第四軍に編入され、遼陽から沙河会戦、黒溝台や奉天会戦を経て遼寧省鉄嶺市まで進出。その後帰国するが、下線部（２）にもある通り中国での従軍体験が後年の人生観を変え、独自の史観を生み出すことになったとある。以下に紹介するが、確かに他の史学者とは研究内容が異なる。

彼の執筆活動の大半は、概ね４種に類別できる。第一には「歴史の精神的説明」⁵、「支那社会思潮」⁶などの中国近現代の思潮や思想の考察⁷に関するもの。第二には「現下の太平洋問題」⁸などという題目からも理解できるように当時の中国の時事問題を扱った論考⁹、そして第三には「満洲に関する史的断想」¹⁰、「日満関係の歴史的考察」¹¹など満洲地方の歴史地理や時事問題に関する論考が多く、満鉄（南満洲鉄道株式会社）の刊行物への寄稿¹²も少なくない。また「許亢宗の行程録に見ゆる遼金時代の満洲交通路」¹³や「契丹勃興史・契丹可敦城考」¹⁴など唐宋代の知識を活かした遼代の論考¹⁵も多い。そして第四には、歴史叢書¹⁶への執筆や教科書¹⁷が見られ、1930年に刊行した共立社刊『東洋史概説』は殊に有名である。

この東洋史学者がなぜ白話小説の翻訳を手掛けたのか。疑問を解く鍵は、本書のはしがきと、日露戦争による中国渡航体験があげられるのではないかと筆者は推測している。

2. 『伝説之支那』の出版書肆について

翻訳刊行の直接的契機となったのは楠林書店からの依頼である。まず『伝説之支那』の「はしがき」を紹介すると、以下の通りである。

南陽堂主人楠林君と私とが、是の書の前稿の事に付て押問答を交へて居りました。

楠林君は、どうしても其の原稿を出版させてくれと云ひ、私は其れを辞退する。私の趣意は、かういうものであります。

「（１）この原稿は、謂はば文反故です。支那の民俗を考へるに付て、雑多な伝説や小説をあさつて居る中に、思ひ当つた物語を、ほんの大筋だけ訳して置いた文反故に過ぎないので、特に或る目的を以て整理した原稿ではありません。原文を逐次に訳したものでも無く、又それを文飾して書き改めたものでもありません。支那民俗を考へるに付て何かの参考になるだらうと思って、折々のすさびに書き集めたのです……（２）要するに、何か役立つ事もあろうと思って、大筋を訳して手筈の中へ納れて置いた投げやりの原稿ですから、出版といふ事は考へても居ず、又それほどの価値もなからうと思ふのです」。

かう謂って幾たびか辞退しました。暫くすると、楠林君が妙に真面目な様子をして、伏し目がちになり「(3) もう其れで十余年の御交際をして居るのです。昔馴染の者が出版に身を入れる、それを助けてやるといふ意味で、原稿を下さいませんか。出版すれば、誰かの参考にもならないことはありますまい。又御迷惑になるといふわけも無いと思ひます。十余年の御交際にあまへて御頼みするのです。」といふ言葉が、平素の快活に似ず、何となく湿って居るやうな心地がしました。……一寸、問答が途絶えて、楠林君のつましやかな居姿が、こそさら悄気て見えました。(4) 又文反故とはいひながらも、強て筐底に埋めて了はなくともよからうと思ひ直して、私は遂に出版を承諾する事になりました。

松井氏の著作では、個人的な記述や出版経緯が記されることは殆どない。その彼が出版に至った経緯を説明するのは極めて珍しい。個人的事情を書かない松井が、なぜ刊行の経緯を記載したのか。それは本書では「刊行に至った経緯を説明しなければならない」状況に置かれた説明を読者に説明する必要があったのではないかと推測できる。

松井による「はしがき」によると、ここでは南陽堂書房の主人が松井の「その原稿」の出版を望み、訳者である松井はそれに反対していたという事情が強調されている。松井の反対理由は下線部(1)及び(2)にある通り、この原稿は自らが中国の民俗性を知る手掛かりとして各種小説を翻訳し保存していた「文反故」つまり「文殻」で、しかも抄訳であることから公刊には値しないと主張している。それに対して南陽堂主人は下線部(3)の通り、筆者との昵懇の間柄から原稿を懇願する。最終的には下線部(4)の通り、文反故でも「強て筐底に埋めて了はなくともよからう」と松井が思い直して出版を渋々許可した。訳者もこの出版は本意ではなかったので、経緯を説明する必要があったのであろう。

また、訳者から出版の許可を得た南陽堂書房主人とは、どのような人物であったのか。

『伝説の支那』の奥付を見ると、発行者には「東京市本郷区元町二丁目六六 楠林安三郎」とあり、発行所には発行者と同一所在地にある「南陽堂書房 楠林書店」の二つの書肆が併記されている。そこで南陽堂書房と楠林書店について調査したところ、楠林書店を出版元とした書籍は本書のみで、南陽堂書房も出版書籍を確認出来ない。ただし同一の発行者と所在地で和漢洋の古書を扱う南陽堂本店があり、南陽堂本店が刊行した古書目録が幾つか現存することが確認出来る。その一つである『南陽堂本店古書目録』(南陽堂本店、1941年)によると、南陽堂本店の創業は明治29年(1896年)とあり¹⁸、梅沢精一『日本南画史』(1919年)や、橋本秀邦『雅邦草彙集』(1920年)などの美術書を中心として、南陽堂本店が出版元となっている書籍も合計6冊確認出来る¹⁹。

『伝説の支那』巻末には、南陽堂本店を出版元とする書籍が「楠林書店発行書目」として紹介されているため、同一店舗で古書肆部門が南陽堂本店、出版部門が楠林書店であったと考える方が妥当であろう。出版事業は1919年から始まり1923年で終了しているが、古書肆は継続しており、同業者の雑誌にも寄稿文が見える²⁰。また楠林は美術品コレクターでもあり、所蔵する「露殿物語絵巻」は専門書や雑誌などで紹介されている²¹。

3. 松井等による翻訳状況について

松井等の翻訳は如何なるものであったのか、それを分析したい。松井が翻訳した『京本通俗小説』「菩薩蛮」「拗相公」は、「三言」では『警世通言』巻7「陳可常端陽仙化」及び『警世通言』巻4「拗相公飲恨半山堂」に該当する。

『警世通言』巻7は、増田渉(1926)²²、吉川幸次郎(1946)²³、村松暎(1951)²⁴、辛島驍(1959)²⁵、松枝茂夫(1970)²⁶と、一線級の白話小説研究者が翻訳を手掛けているが、東京帝国大学文学部支那文学科在学中であった増田渉の翻訳が1927年に発表されたのを除けば、吉川幸次郎訳、村松暎訳、松枝茂夫訳、辛島驍訳と、翻訳が本格的に行われたのは終戦後から1950年代に集中する。

また、『警世通言』巻4の翻訳も同様の傾向が見られる。戦前の井上紅梅(1940)²⁷を筆頭に、村松暎(1951)²⁸、吉川幸次郎(1956)²⁹、松枝茂夫(1970)³⁰、辛島驍訳(1959)³¹と続くが、本格的に翻訳活動が行われたのはこちらも1950年代である。これら従来確認されている翻訳事例を見ても、今回発見された『警世通言』巻7の松井訳(1922)は、従来最も初期の翻訳であった増田訳よりも4年早く、『警世通言』巻4の松井訳(1922)に至っては紅梅訳よりも18年早い。いかに先駆的な翻訳であったかが理解できよう。

その上で松井による『警世通言』巻7の翻訳状況の分析を試みたい。まず冒頭部分を紹介する。原文で、

話說大宋高宗紹興年間、温州府樂清縣有一秀才、姓陳名義、字可常、年方二十四歲。生得眉目清秀、且是聰明。無書不讀、無史不通。紹興年間、三舉不第、就於臨安府衆安橋命鋪、算看本身造物。那先生言、「(1) 命有華蓋、卻無官星、只好出家。」(2) 陳秀才自小聽得母親說、生下他時、夢見一尊金身羅漢投懷。(3) 今日功名蹭蹬之際、又聞星家此言、忿一口氣、回店歇了一夜。早起算還了房宿錢、僱人挑了行李、逕來靈隱寺投奔印鐵牛長老出家、做了行者。

とあるところを、松井等は以下の通り翻訳している。

高宗皇帝の紹興年間に、温州府樂清県に、姓は陳、名は義、字は可常といふ若者が居りました。年は二十四歳で、容貌も清らか上品な人物で、学問にも深く通じて居りました。ところが三度も官吏採用試験に失敗したので、臨安府衆安橋の占ひ所へ往って我が身の運を觀てもらひますと、「(1) あなたは役人には向かない、出家なさるがよからう」と謂はれました。(2) 若者は、母から聞かされた事を思ひ出して考へ込みました。「わたしを生む時に、母は金色に輝いた一人の羅漢が懷に入ったといふ夢を見たといふ事だ、(3) それに占者もああ言ふ所を見ると、やはり出家しなければならないのだらう」、と急に思ひ立って宿に帰り、一夜を過ごした明くる朝、宿賃を払ひすませ、人を雇って行李をかつがせながら、名高い靈隱寺を指して道を急ぎました。その寺の印鉄牛長老に訳を話して、出家をさせてもらう事に

なりました。

翻訳状況を見ると、概ね原文を忠実に翻訳していることが分かる。ただ、一部気になる翻訳箇所が見られるので、その点を中心に分析を試みたい。

まず傍線部(1)の原文「命有華蓋、卻無官星」は、忠実に逐語訳すると「あなたの運勢には『華蓋』はありますが、『官星』はございません」となるが、松井は「あなたは役人には向かない」と翻訳する。

「華蓋」は、正史天文志に登場する星の名称である。しかしここでは占い師の発言に「華蓋」が登場するのだから、星命術の術語としての意味——災難をもたらす運勢であることを念頭に解釈すべきである。しかし松井訳ではこの「命有華蓋」を翻訳せず、後半の「卻無官星」のみが訳されているにすぎない。恐らくは松井も前後の文脈から星命術上の説明であることは理解したであろうが、星命術としての意味は調べが付かなかったのではないかな。ただ、これは同時代の増田訳も同様で、増田も「命有華蓋」を訳さずに「あなたは役人には向かない」と後半部しか訳していない。

この「命有華蓋」はその後も訳者を悩ませている。例えば松井・増田訳の20年後に発表された吉川訳も「御運勢に華蓋の星はありますが、見当たらずは役人の星」(357頁)と「華蓋」を登場させたが、華蓋の意味は訳出していない。村松訳も「高貴の星はおありだが、あいにくとお役人の星はみえておりませぬ」(56頁)と訳語が付けたが、曖昧な印象をぬぐえない。結局1959年の辛島訳で「御運の中には、華蓋はございますが、役人におなりになる星は見当たりませぬ。」として「華蓋」に「星命術の術語。華蓋を犯している者は僧になる運を持っていると言われる」という注釈(187頁参照。注釈は407頁)が添えられるまでは正確な訳出は困難であったのであろう。

次の傍線部(2)には「陳秀才自小聽得母親説、生下他時、夢見一尊金身羅漢投懷。」とあるが、松井は「若者は、母から聞かされた事を思ひ出して考へ込みました」と訳している。原文には「陳秀才自小聽得母親説」とあるので、「陳秀才は小さいときから母親が……と言ったのを聴いていました」とするのが妥当で、訳文後半の「考へ込みました」は原文にはない表現である。

また傍線部(3)「今日功名踏蹬之際、又聞星家此言、忿一口氣、回店歇了一夜。早起算還了房宿錢、僱人挑了行李、逕來靈隱寺投奔印鐵牛長老出家、做了行者」は、逐語訳すると、「今日は試験に落ちた上に、星占い師にもこう言われたこともあり、(可常は)むっと来て、宿に戻り一晩休んだ。しかし、翌朝には宿の支払いを済ませて、人を雇って荷物を担がせて、そのまま靈隱寺の印鐵牛長老のもとに参上して、行者となった」となる。

この箇所を松井は「『それに占者もああ言ふ所を見ると、やはり出家しなければならないのだらう』、と急に思ひ立って宿に帰り、一夜を過ごした明るる朝、宿賃を払ひすませ、人を雇って行李をかつがせながら、名高い靈隱寺を指して道を急ぎました」と訳している。

この一文のポイントは「忿一口氣」の訳出である。つまり可常は才能がありながら、なかなか科擧に及第できない。それにもかかわらず出世できる運命にはないと占い師に指摘されたことに、可常は忿一口氣——つまり「反発」したものの、宿で一晩過ごすうちに占い師の言うことももっともだと思い、宿を出てそのまま靈隱寺に向かったのである。しかし松井は可常が「忿一口氣」し、一

晩で考え直した経緯を略している。この箇所は20年後の吉川訳で「易者のこうした言葉を聞いたものですから、むっと来たというわけで」(357頁)と初めて訳出されているが、同時代の増田訳でも訳出されていない。「忿一口氣」は前述の「華蓋」と異なり、翻訳が難しい表現ではない。ただ、可常は占い師の発言に一度憤慨したものの、思い直して出家したため、訳出しなくても話柄に支障は起きない。そのため「はしがき」で訳者が「原文を逐次に訳したものでは無く」と説明したとおり、「忿一口氣」は大意に影響を及ぼさないものとして省略したのであろう。

次に松井による「拗相公」(『警世通言』巻4)の翻訳状況を分析する。ここでは老婆が鶏や豚に「拗相公」と名付けた理由を尋ねる部分を紹介する。原文では、

(1) 江居和衆人看見、無不驚訝、荊公心愈不樂、因問老嫗道、「老人家何為呼雞之名如此？」老嫗道、「官人難道不知王安石即當今之丞相、拗相公是他的渾名？自王安石做了相公、立新法以擾民。老妾二十年孀婦、子媳俱無、只與一婢同處。(2) 婦女二口、也要出免役、助役等錢。錢既出了、差役如故。老妾以桑麻為業、蠶未成眠、便預借絲錢用了。麻未上機、又借布錢用了。桑麻失利、只得畜豬養雞、等候吏胥里保來徵役錢。或准與他、或烹來絆待他、自家不曾嘗一塊肉。故此民間怨恨新法、入於骨髓。畜養雞、都呼為拗相公、王安石、把王安石當做畜生。今世沒奈何他、後世得他變為異類、烹而食之、以快胸中之恨耳。」

とあるところを、松井は以下の通り訳出している。

(1) それをみた江居を始め皆の者は、変な事をするものだと驚きましたが、王安石は、たまらなく厭な気がしました。

「お婆さん、なぜ然う言って鶏や豚を呼ぶのですか」と尋ねますと、

「あなたも御存知の筈です、王安石といふのは当今の宰相、拗ねもの宰相といふのは、その渾名ですよ、あの人が宰相となってから、新法を振り廻はして世間大迷惑をかけました、わたしは二十年も孀ぐらしをして、伴も居ず媳も無く、(2) 只一人の婢を使つてゐるばかりです、力業の御奉公をする代りに、錢を差し出して済ませるといふ御規則が男の方へは当然として、女二人のわたしたちへも係つて来るのです、わたしは蠶絲や麻布つくりで活計を立てて居りますが、錢を取り立てられるのが苦しくて、てんで絲も布も出来上がらない中に、その売り上げ代を前借りして急場の間に合わせるといふ始末です、それで絲や布は立ち行きませんから、為方なく豚や鶏を畜つて置いて、お役人が錢を取り立てに来ると、それを差し上げたり、時にはそれを料理して絆待を致します、肉一ト切れだって、自分たちの口には入りません、それですもの、新法が忌々しくてたまらない所から、此の辺では、畜つてある豚や鶏に、拗ねもの宰相だの王安石だのといふ名を付けて、王安石を畜生扱ひにして居のです。今の世では彼奴を如何にもする事ができませんが、後世彼奴畜生に生まれ変わって、烹て食はれるやうになったら、さぞ世間の人たちの胸が晴々する事だらうと思ひますよ」(304

～305頁参照)

と翻訳している。こちら未訳篇の翻訳とは思えぬほど翻訳水準が高いが、気になる箇所も見られないわけではない。例えば傍線部(1)「江居和衆人看見、無不驚訝」である。この場面は、老婆が家畜に「相勘公」と名付けていたのを、荆公の従者である江居やその他の人々がそれを見て、驚かない者はいなかった、つまり皆が驚いたという一文であり、松井ほどの翻訳水準ならば苦もなく翻訳できる箇所に違いない。それにも関わらず彼は「それをみた江居を始め皆の者は、変な事をするものだと驚きましたが」と、原文にはない「変な事をするものだ」を加筆している。敢えて加筆した意図を探ると、直後に現れる本篇最大の見せ場となる老婆の発言に関心を持たせるためと思われる。

また傍線部(2)の「婦女二口、也要出免役、助役等錢。錢既出了、差役如故」は、老婆と婢という女性二人の家であっても、新法の一つである募役法^{ぼえき}の免役錢・助役錢の納付が必要であった。ところが(免役錢・助役錢の)錢を納付しても差役は相変わらず以前のまと言っている。

これは王安石の新法の一つである募役法の事で、郷村の力役負担を軽くするため、賦役免除の代わりに免役錢・助役錢を徴収した。しかし現実には免役錢・助役錢を支払っても力役負担は変わらなかったという矛盾に留意しなければならない。その箇所を松井は「只一人の婢を使つてゐるばかりです、力業の御奉公をする代りに、錢を差し出して済ませるといふ御規則が男の方へは当然として、女二人のわたしたちへも係って来るのです」と訳している。「力業の御奉公をする代りに、錢を差し出して済ませるといふ御規則」と募役法の説明を加筆しているが、免役錢・助役錢を支払っても力役負担は変わらなかったのではなく、女所帯の老婆の家まで免役錢・助役錢を支払されたという段階で途切れてしまい、「差役如故」が訳されていない。この箇所は1951年の村松訳が「下役人はもとの通りなんですからね」(111頁)と「差役」を「下役人」と誤訳している以外は、吉川訳(1956)、松枝訳(1970)、辛島訳(1959)はすべて正確に翻訳している。

以上、紙幅の関係からの気になる箇所を中心に考察したが、松井訳は概ね正確であり、しかも(これまでの「三言」所収篇の翻訳事例でも言及した通り)未訳篇の翻訳は誤訳の比率が高いのが通例である。しかし松井訳には大きな誤訳は殆ど見られず、当時の斯界に於ける翻訳水準から見ると、比較的精度の高い翻訳であったとすることが出来る。

4. 受容史上における松井訳の位置付け

次に受容史的観点から見た松井訳の位置付けは如何なるものであったのか検討を行いたい。松井訳の意義として筆頭にあげられるのは、松井訳が当時殆ど試みられていなかった口語訳を採用したという点、そして白話小説の口語訳化の先駆的事例としての意義である。

「三言」所収篇の口語訳の動きについて、初期の翻訳を時系列で並べると、以下の通り僅かの差ではあるが1922年10月に発表された佐藤春夫による重訳の事例よりも早く、名実共に「三言」所収篇の「最初の口語訳」であったとすることが出来る。

- 1922年 9月 松井等『伝説之支那』
 1922年10月 佐藤春夫「百花村物語」(独語の重訳)
 1922年10月 佐藤春夫「花と風」(独語の重訳)
 1924年 7月 桃義会『鴛鴦譜』
 1924年11月 井上紅梅『新訳今古奇観』
 1925年 5月 鈴木真海『鴛鴦譜 外三種』
 1926年 4月 井上紅梅「薄情郎」他

上記の通り、口語訳された初期の事例は、「三言」の発見(1926年7月)よりも早かった。「三言」の発見に伴う学界の活況とそれに伴う翻訳の隆盛は既に周知の事実であるが、それ以前の「三言」の選集である『今古奇観』や前述の『京本通俗小説』をもとにして活発に翻訳されていたことが理解できる。そして特に注目すべきは、「三言」の口語訳が白話小説の口語訳の是非という学界に於ける議論や、「三言」の発見という学界の動向に関係なく試行されていた点である。

本論で取り上げる所の「白話」は、明代前後の中国人が実際に話していた口頭語を漢字表記したものがベースとなった口語文であり、文語文である漢文とは表現形態が大きく異なる。そのため白話小説の表現は、漢文に比べて人物の会話や心理描写が詳細なディテールで表現されている。そのため漢文と同じ書き下しによる訓読翻訳では、白話が得手とする表現が充分に活かせず、往々にして正確な翻訳に支障を来すことが多かった。

そのため明治以降の日本に於ける言文一致運動の進展と、日本語の口語表現の発展に伴い、白話小説を日本の口語に翻訳する是非が論じられるようになった。そもそも当時の学界では口語訳派・訓読翻訳派の双方から様々な批判が噴出し、当時の白話小説研究の泰斗である塩谷温も、後々の文豪による大手筆を待たねばならないと述べているが、上述の松井や春夫、紅梅たちは、学界における口語訳化の議論を飛び越えて一気に口語訳を発表し、それが「既成事実」となったことがわかる。これら既成事実化した口語訳については、二つの事例が見られる。それが(1)欧米言語に翻訳された白話小説を日本語に重訳する事例。そして(2)中国人の助力による口語訳の事例である。

(1)の事例としては、佐藤春夫が1922年10月に発表した「三言」所収篇の翻訳「^{ひやつかん}百花村物語」³²と「花と風」³³が該当する。「百花村物語」と「花と風」は、『今古奇観』巻八の正文(本文)と入話(導入部)を典拠とした作品で、何れも『今古奇観』の独訳である Greiner, Chinesische Abende 中の“Der blumennarr”を使用した重訳である。原作が白話小説であっても春夫は独語からの翻訳したため、そこからわざわざ訓読翻訳を行う必要は認められない。

もう一つが中国人の助力を得た翻訳事例である。井上紅梅や桃義会については、拙稿³⁴で紹介しているのでそれに譲るが、井上紅梅が『今古奇観』『金瓶梅』等の白話小説の翻訳する契機となったのが中国人との結婚であり、彼自身も中国人との結婚を「研究上幾分手助けになった」(井上紅梅「葦素雑誌」)と回想している。また桃義会の翻訳についても、翻訳担当の茜花氏が書いた「緒言」で「試訳するに当りては、華人許問答氏の助力を得」たと記している。紅梅や桃義会が翻訳を手が

けた頃、白話語彙の工具書は殆ど整備されていない。そのため中国人との交流と協力が白話小説翻訳に不可欠であった。

しかし今回の松井等の事例は、他言語からの重訳や中国人の助力の事例には該当しない。しかも鈴木真海のように白話小説の訓読翻訳に関する是非について議論があることを把握した上で、訳本の「はしがき」に敢えて口語訳を行ったその意義について言及した文言も見出すことも出来ず、恐らくは口語訳化の議論を認識せずに翻訳した可能性が高い。

状況証拠ではあるが松井等の履歴は東京帝国大学の出身であるものの史学科の卒業であり、議論の渦中にあった支那文学科の所属ではない。また、『伝説之支那』の内容構成を見ても、収録60篇の中で白話小説は僅か2篇のみであり、文言小説の翻訳に添えられる形で出版されていることなど、訳者本人がどれだけ白話小説の口語訳の受容史的な価値を見いだしていたのか定かではない。恐らくは訳者が「はしがき」で述べる通り、「雑多な伝説や小説をあさって居る中に、思ひ当った物語を、ほんの大筋だけ訳して置いた」のであり、「特に或る目的を以て整理した原稿」ではない可能性が高い。つまり『伝説之支那』に収められた白話小説の口語訳は、訳者が明確な出版や公表の意図をもって刊行された種類の翻訳とは言い難いのである。

斯界に於ける口語訳の問題を知っていたか否かはともかく、当時は文言であれ白話であれ中国古典小説は書き下しにすることが一般的であり、そのことを松井自身も知らなかった筈はない。それを敢えて口語訳したのは、彼の経歴の中に相応の事由が存在すると考える事も可能であろう。その上で松井等が『伝説之支那』刊行に至るまでの彼の経歴を見ると、彼の経歴は当時白話小説の口語訳を主張した宮原民平^{みやはらみんぺい}の経歴に酷似しているという点が注目されるのである。

宮原民平（1884～1944）は、大正時代から戦前にかけての東洋協会大学の教授で『北京声音弁』（文求堂、1921）、『支那国音字典』（文求堂、1936）などの中国語の発音辞典や、『国訳漢文大成』及び『古典劇大系』における『西廂記』『還魂記』『漢宮秋』『寶娥冤』『倩女離魂』『琵琶記』等の戯曲の翻訳で著名である。その彼は戯曲小説の翻訳作業を介して「真実の所従來の日本人には、支那の小説や戯曲はよく読めていなかった」³⁵という事実を痛感し、「元來支那の俗語を漢文訓読の方式で読むといふことは無理である。ところが我が支那文学の研究者には、この無理な方法によって俗語を解しようとする人が多い。その結果は平気で誤訳をすることになる」³⁶と白話文を訓読していた事に誤訳の原因があると分析している。

その彼が白話文の翻訳方法として何が最適と考えたのか。それは「畢竟支那文は支那音で棒読みしなければ徹底できない」³⁷という判断である。そして宮原自身も戯曲『西廂記』の翻訳³⁸を刊行した際に、凡例に「本書は意義の通達を旨として、極めて平易なる辞句を用い、時に一二現代の新語すら用いたり」と口語訳で翻訳に取り組んでいる。ではなぜ宮原は、それだけ強い信念を持って口語訳を推進したのであろうか。それを解く鍵が彼の経歴に隠されているのである。

宮原は1884年佐賀県に生まれ、1902年に創立間もない台湾協会専門学校（現拓殖大学）に入学する。当時はまさに日露戦争が勃発した時期で、1904年には宮原も2年生在学のまま陸軍省学生通訳官を命ぜられ満洲に出征、その後更に1年半清国に留学している。

二度の中国渡航経験を持つ宮原は、その経験に立脚し、独自の中国を理解する方法を会得している。それが「我身みづから支那人に為ってみることである。支那人と共に生活することである。彼等と共に、住み、食ひ、働き、眠り、時に争ひ、時に親しみ、彼等の日常生活の底の底まで覗いてみることである」³⁹というものである。なぜ宮原はこれを中国理解の最善の方法と考えるに至ったのか。それは宮原自身が、現実の中国社会に触れる中で、漢学としてとらえた中国像と現実の中国像が大きく乖離していることを痛感したからに他ならない。

松井はこの種の中国理解に関する文章を殆ど書き残しておらず、その詳細は分からない面が多い。ただ松井は宮原とはほぼ同年代で、宮原同様に日露戦争に応召し、何れも満州へ派遣されている。そして冒頭に紹介したとおり、他ならぬ松井も「その独自の史観はこの間の軍事生活により多大な影響を受けた」と『大人名辞典』で述べられているのである。恐らく宮原と同様に松井も、文献のみが唯一の手段であった伝統的な漢学や漢文学という範疇で中国を理解しなかったに違いない。彼が中国で会得した中国理解の意識が、旧態依然とした訓読翻訳に弊害を感じ、それまで試みられることの少なかった口語訳をごく自然に受け入れる土壌となったのではないか。

おわりに

本論の内容を要約すると、次の通りである。

- I 松井等『伝説之支那』は、これまで「三言」所収篇における最古の口語訳であった『鴛鴦譜』よりも約2年早く発表されている。本書は主に六朝から宋代文言小説の翻訳集であるが、その巻末に当時発見されたばかりの『京本通俗小説』から2篇が翻訳されていた。
- II 本書の原稿は松井が中国の民俗性を知る手掛かりとして各種小説を翻訳し保存していた「文反故」であり、出版を前提とした翻訳ではなかった。
- III 訳文を分析したところ、松井訳は概ね正確であり、未訳篇の翻訳の場合には誤訳の比率が高い事が通例であるにも関わらず、松井訳には大きな誤訳は殆ど見られず、当時の斯界に於ける翻訳水準から見ると、比較的精度の高い翻訳であったと言える。
- IV 当時の白話小説の口語訳は、欧米言語に翻訳された白話小説を日本語に重訳する事例と、中国人の助力による口語訳の事例が認められるが、今回の松井訳は、これらに該当せず、恐らくは口語訳化の議論を認識せずに翻訳した可能性が高い。
- V 松井が敢えて口語訳したのは、その経歴に由来する可能性が高い。松井と同時期に中国の渡航経験を持つ宮原も、現実の中国社会に触れる中で、漢学としてとらえた中国像と現実の中国像が大きく乖離していることを痛感、強い信念を持って口語訳を推進した。松井もかかる中国渡航経験から従来の訓読翻訳に疑問を感じ、口語訳をごく自然に受け入れたのではなかろうか。

注

- 1 拙稿「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について——1910年代～20年代の動向を中心として」（『国際文化研究科論集』14、2006）、「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容につ

いて——明治時代から大正時代までの翻訳事業を中心として」(同14、2006)、「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について——1926年～1939年までの動向を中心として」(同15、2007)、「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について——1940年～1949年までの動向を中心として」(同16、2008)、「近代日本に於ける中国白話小説集「三言」所収篇の受容について——神谷衡平と林房雄の訳業を中心として」(同17、2009)、「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について——村松暎・魚返善雄の翻訳と翻訳層の交代について」(同17、2009)、「支那に浸る人——井上紅梅が描いた日中文化交流」(静永健編『から船往來』(中国書店、2009)、「井上紅梅の研究——彼の生涯と受容史から見たその業績を中心として」(『小説・芸能から見た海域交流』汲古書院、2010)、「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について——増田渉の事例(1927)を中心として」(『国際文化研究科論集』19、2011)、拙稿「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について——増田渉の事例(1927)を中心として」(同19、2011)、「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について——新たに発見された桃義会(1924)の翻訳事例を中心として」(同20、2012) 参照。

- 2 塩谷温『支那文学概論講話』466頁参照。
- 3 ①「碾玉観音」(『警世通言』巻8「崔待詔生死冤家」)②「菩薩蛮」(『警世通言』巻7「陳可常端陽仙化」)③「西山一窟鬼」(『警世通言』巻14「一窟鬼癡道人除怪」)④「志誠張主管」(『警世通言』巻16「小夫人金錢贈年少」)⑤「拗相公」(『警世通言』巻4「拗相公飲恨半山堂」)⑥「錯斬崔寧」(『醒世恒言』巻33「十五貫戲言成巧禍」)⑦「馮玉梅團圓」(『警世通言』巻12「范鰥兒雙鏡重圓」)
- 4 『大人名事典(6)』(平凡社、1954) 4頁参照。
- 5 『国学院雑誌』(24巻4号、1918)
- 6 『岩波講座世界思潮』(2輯、1928)
- 7 「支那民族」(『岩波講座東洋思潮(1)』岩波書店、1934)、「支那思想・道德思想」(『岩波講座東洋思潮10』岩波書店、1935)、「支那現代思潮」(『岩波講座東洋思潮14』岩波書店、1935)、「東洋現代思潮 支那現代思潮」(『岩波講座東洋思潮11』岩波書店、1936)
- 8 『国学院雑誌』(27巻6号、1921)
- 9 主要論考「日支関係の理論的検討」(『国際評論』4巻5号、1935)、「最近支那の社会と大同思想」(『支那事情講習録』東亜同文会調査編纂部、1929)、「民国革命史論」(『支那研究』岩波書店、1930)、「支那国民革命運動」(『現代支那事情の研究』大阪屋号書店、1928)、「党治と絶えざる分裂」(『支那及満蒙』新潮社、1932)、「憫むべき支那か、勝てる支那か」(『国際評論』2巻1号、1933)
- 10 『帝国教育』(595、1932)
- 11 『地理講座 外国篇 第1巻(アジアの概論と満洲・蒙古)』(改造社、1933)
- 12 箭内互・稲葉岩吉・松井等共著『満洲歴史地理(1)』(南満洲鉄道株式会社、1913)、同『満洲歴史地理(2)』(南満洲鉄道株式会社、1913)
- 13 『歴史調査報告』(2巻、1940)
- 14 『満鮮地理歴史研究報告』(1、1926)、
- 15 「文化の上より観たる漢人と支那北方民族の關係」(『国学院雑誌』20巻7号、1914)、「契丹の国軍編制及

- 戦術・宋対契丹の戦略地理」(『満鮮地理歴史研究報告』4、1926)、「契丹人の信仰」(『満鮮地理歴史研究報告』8、1926)、『満洲歴史地理』(南満洲鉄道、1927)
- 16 『東洋文化観』(国史講習会、1922)、『支那現代史』(明善堂、1924)、『支那現代思潮』(小西書店、1924)、『東洋史講座(4・8・9)』(国史講習会雄山閣、1928~1930)、『現代史学大系(12)』(共立社、1931)、『世界現状大観・中華民国編』(新潮社、1932)、『東洋近世史(2)』(平凡社、1935)、『東洋文化史大系(3)』(誠文堂新光社、1939)、『支那近代史』(明善社、1939)
- 17 『改訂中等東洋歴史』(東京宝文館、1915)、『東洋史要釈』(共立出版、1934)、『東洋史概説』(共立社、1930)、『東洋史精粹』(共立社、1931)
- 18 国立国会図書館所蔵『南陽堂本店古書販売目録(4)』(南陽堂、1918)及び『南陽堂本店古書目録』(南陽堂本店、1941)、明治大学図書館所蔵『南陽堂本店古書販売目録(39)』(南陽堂本店、1928)
- 19 橋本秀邦『雅邦遺墨集(乾)』(南陽堂本店、1920)、橋本秀邦『雅邦遺墨集(坤)』(南陽堂本店、1921)、高瀬代次郎『佐藤一齋と其門人』(南陽堂本店、1922)
- 20 楠林安三郎「業界四十年の回顧」(『紙魚の昔がたり(下)』訪書会、1934)
- 21 「楠林安三郎所蔵 露殿物語繪卷」(『慶長寛永風俗画集』画報社、1926)、「露殿物語繪卷——六條三筋町の場面——楠林安三郎氏蔵」(『浮世絵界』4巻6号、1939)
- 22 増田渉「可常の話」『日刊支那事情』昭和2年1月14日~1月22日条。
- 23 吉川幸次郎「菩薩蛮」(『芸林間歩』7、1946)
- 24 村松暎『杭州綺譚——京本通俗小説』(酣燈社、1951)
- 25 辛島驍『全訳中国文学大系・警世通言(1)』(東洋文化協会、1959)
- 26 松枝茂夫『中国古典文学大系 宋・元・明通俗小説選』(平凡社、1970)
- 27 井上紅梅「王安石の涙」(『東洋』昭和15年6月号)
- 28 村松暎『杭州奇譚』(酣燈社、1951)
- 29 吉川幸次郎『西山一窟鬼』(筑摩書房、1956)
- 30 松枝茂夫『中国古典文学大系 宋・元・明通俗小説選』(平凡社、1970)
- 31 辛島驍『全訳中国文学大系・警世通言(1)』(東洋文化協会、1959)
- 32 佐藤春夫「百花村物語」(『改造』4巻10~11号、1922)
- 33 佐藤春夫「花と風」(『女性改造』創刊号、1922)
- 34 拙稿「井上紅梅の研究」(勝山稔編『小説・芸能から見た海域交流』汲古書院、2010)、拙稿「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について——新たに発見された桃義会(1924)の翻訳事例を中心として」(『国際文化研究科論集』20、2012)参照。
- 35 宮原民平「我国に於ける支那戯曲の読解」(『拓殖大学論集』1巻1号、1930)
- 36 宮原民平「翻訳雑感」(『東洋』30巻6号、1927)
- 37 宮原民平「まえがき」『支那小説戯曲史概説』(共立社、1925)
- 38 宮原民平・金井保三訳『西廂歌劇』(文求堂書店、1914)
- 39 宮原民平「支那研究の一方面」『拓殖文化』(29、1927)

附記 本稿は平成25年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（B）海域交流をキーワードとした中国通俗文芸の学際的研究）の交付を受けた研究成果の一部である。

謝辞 本稿作成にあたり松井良夫氏から様々ご教示を賜りました。また松井等氏の写真掲載については、お茶の水大学付属図書館デジタルアーカイブズから協力を賜りました。ここに感謝の意を表します。